いずみさの昔と今 第294回

「歴史館に寄贈された資料③ ～小川翠村の作画を支えた画材・スケッチ～」

前回に引き続き、春季企画展「新収蔵資料展」に関連して、令和元年度に寄贈を受けた資料について、3回目となる今回は泉佐野市ゆかりの日本画家・小川翠村の用いた画材と下絵のスケッチを紹介します。

明治35（1902）年、現在の泉佐野市日根野に生まれた翠村は、若干18歳で帝展（帝国美術院展覧会）入選を果たして以降、大阪四天王寺をはじめとする有名寺院の天井絵・襖絵を依頼されるなど、若くして日本画壇に名を馳せた秀才です。当館では、第3回帝展に入選を果たした「南国の楽土」をはじめ翠村の貴重な作品を収蔵していますが、この度新たに、彼の作画を支えた画材とスケッチが収蔵品に加わりました。

翠村が使用していた画材の一つに、「岩絵具」と呼ばれる顔料があります。「岩絵具」とは日本画で使用される顔料であり、天然の鉱物を砕いて作られる粒子状の絵具です。鉱物の粒子の大きさの違いで濃淡を表現しました。天然の鉱物から作られる「岩絵具」は希少であることから、現在では入手できないものもあります。この度新たに収蔵された顔料は翠村が作画に用いていたものであり、翠村が使用した画材を知ることができるうえに、翠村が作画活動を行っていた大正・昭和期の画材が現存し、当時の作画過程をうかがうことができるという点でも貴重な資料といえるでしょう。

画材と併せて翠村の作画背景を知る上で重要となるのが、本画の下絵となるスケッチの数々です。今回寄贈を受けたスケッチの中でも特に注目されるのは、翠村の代表作とも呼べる、翠村の故郷泉南の丘陵地帯に広がるみかん畑を題材とした「南国の楽土」の下絵です。スケッチにはみかん畑の収穫風景や農具の詳細が描かれるほか、「左の此の大きな木が気に入った」「土は非常にやわらかである」など、蜜柑山に何度も足を運ぶなかで自身が感じたことまで詳細に記録しています。翠村は、念入りにスケッチを重ねることで作品の構想を練り、作品の完成度を高めていたようです。このような背景を念頭に置いた上で改めて「南国の楽土」を鑑賞してみると、作品の新たな一面が見えてくることでしょう。

新たな資料を収集・保存し公開することは、博物館の大切な役割です。春季企画展を通して、泉佐野市の歴史を再発見するとともに、博物館の表に見えない業務の一端を知っていただく機会となれば幸いです。

※泉佐野市の行政情報番組「さのテレ！」の5月後半で資料の一部を紹介しました。市のホームページから放送内容を確認することができますので、ぜひご覧ください。

▲小川翠村所有の画材（当館蔵）

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの
☎469-7140 Fax469-7141
休館日　月曜日、祝日（祝日が月曜日の場合は月曜日と火曜日が休館）
開館時間
午前9時～午後5時
（入館は午後4時30分まで）
入館料　無料

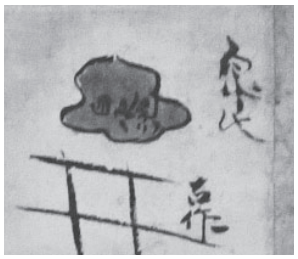
日本遺産・中世日根荘を巡る⑪

～絵図編（10）「白水池」～

JAPAN HERITAGE
日本遺産

「日本遺産」に認定された「旅引付と二枚の絵図が伝えるまち ―中世日根荘の風景―」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介します。

問合先　文化財保護課



昭和50年ごろの白水池（上部がJR日根野駅）▼
◀日根野村絵図に記された「白水池」

約700年前に日根野村荒野開発絵図に描かれた「白水池」は「しらみずいけ」「しらずいけ」と呼ばれ、JR阪和線日根野駅のロータリー付近にかつて存在した溜池です。平成2年から開始された日根野土地区画整理事業により、今ではもう当時の面影を見ることはできません。

現在は、府道の道路標識「白水池東」「白水池」「白水池西」としてわずかな痕跡を留めるに過ぎませんが、古くは鎌倉時代の「九条家文書」にも登場しています。絵図を見ると、白水池の横に「泉池」と注記されているように見えます。「泉」の文字は白と水が複合したものであるので、後世に「白水」の名称に変化したのかもしれません。絵図では荒野の注記のすぐ左に位置する白水池の下には古作という文字が注記され、絵図製作以前より溜池灌漑による耕作地が存在したことを物語っています。

江戸時代になると新田開発に伴い井川などから水路が整備され、農業パイプラインが整備されるまでは佐野村、長滝村への農業用水の供給が行われた重要な中継地としての役割を果たし、最終的に農業用ため池としての役目を終えたと推察されます。

※絵図の写真は、歴史館いずみさの所蔵の複製を使用（原本は宮内庁書陵部所蔵）